

創立者 藤田正方の 建学の精神と自校史

東京薬科大学名誉教授
川瀬 清

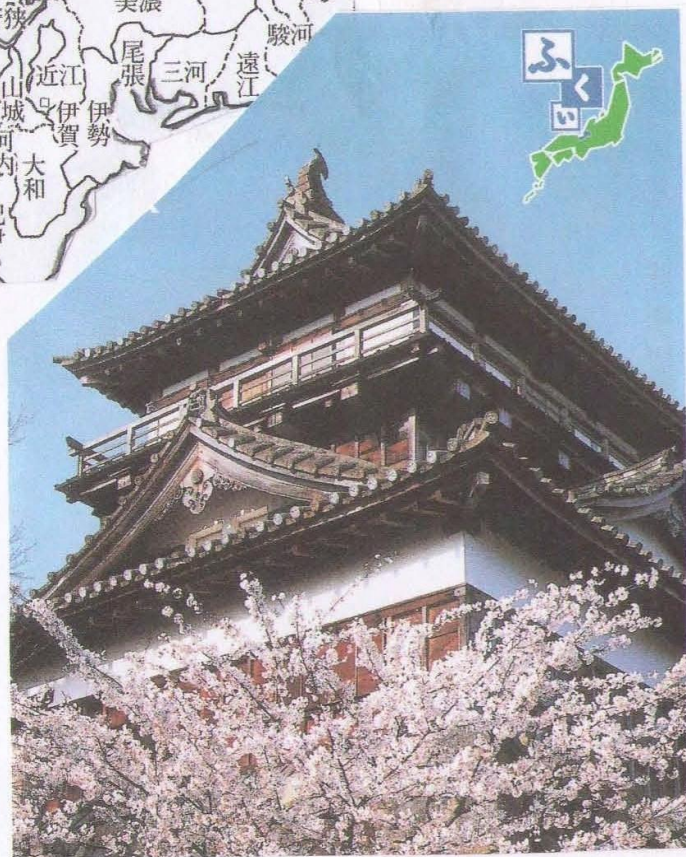
日本初の薬剤師（薬舗主）教育機関の創設

「本学生みの親・藤田正方先生」の生涯

丸岡城



藤田正方 (1846—86)



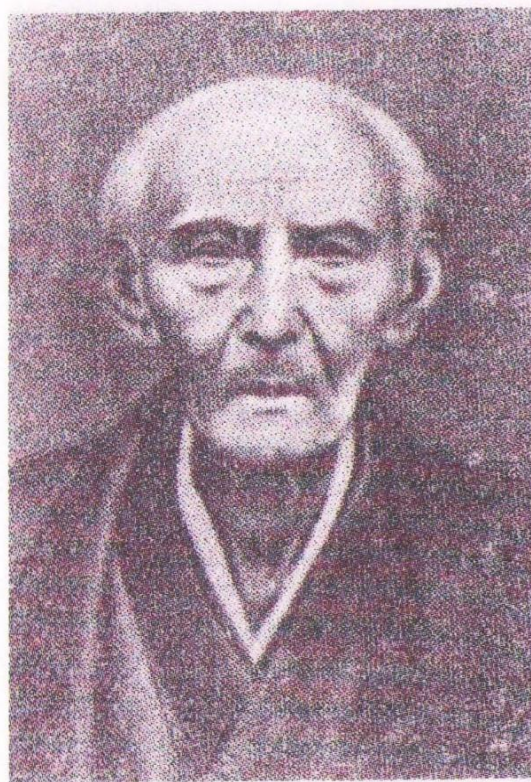
藤田正方

1846 (弘化3)

丸岡藩医・藤田家 (丸岡・谷町) に生まる。

幼にして 祖父・藤田正大・天洋の薫陶を受く。

正方祖父・藤田天洋



「正方は 57 歳時の孫」

1789・寛政元年生る

丸岡藩侍医、同藩蘭学医術の開祖
京都に游学、漢方医学を野呂天然に
学び、また西洋医学も修めて帰郷。
37 歳で藩御側医師。藩校・平章館
及び私塾・朴斎塾で、習字・漢学
・医学・窮理 (物理) 学の教鞭を
執り、門弟二百余名、教えを受け
て医術開業する者数十名。摂生養
生を守り、明治開花を親しく見て、
1879・明治 12 年卒 (90 歳)

1863 (文久 3・17 歳)

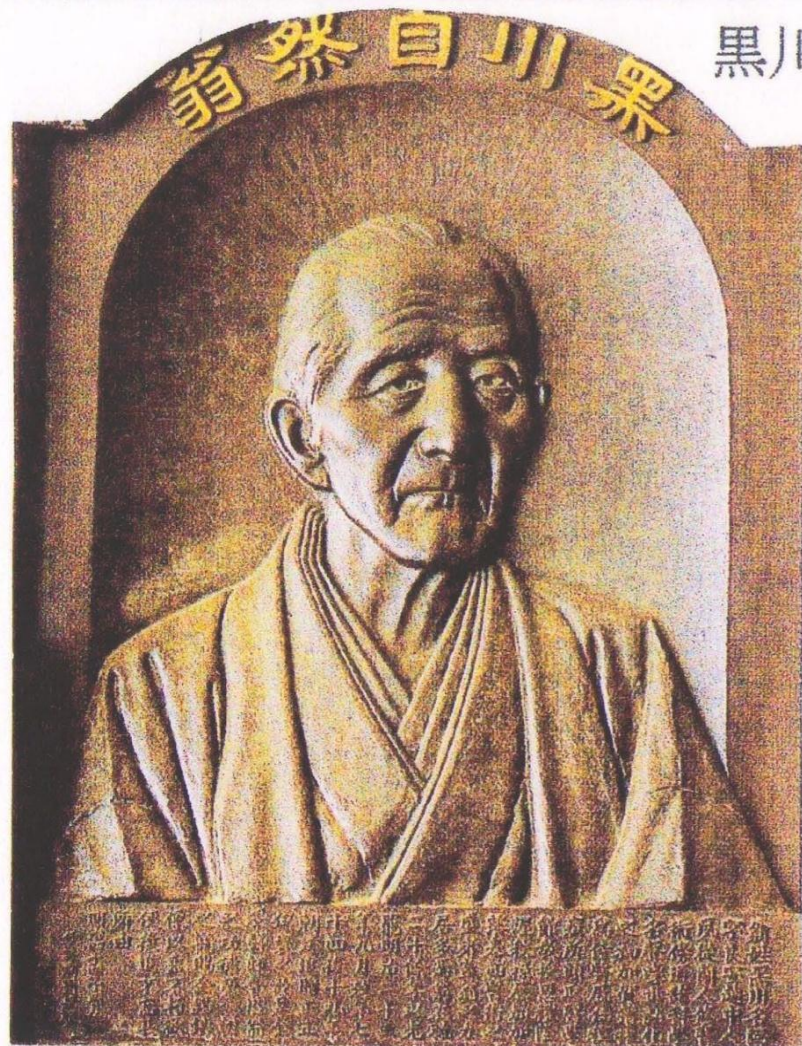
金沢・黒川良安に入門、修学。

間もなく 翻訳筆記方を被命。

黒川良安 (まさやす)

(1817・文化 14～1890・明治 23)

「正方より 29 歳年長」



越中黒川の医家の生れ、12 歳時父に連れられて長崎に遊学、吉雄権之助に蘭語・医学を学び、滞在 7 年、帰国途中金沢に留まり、蘭学学習、縁あって江戸・坪井信道の門に学ぶ。金沢帰国後は、藩侯の侍医となり、金沢における近代医学の基礎を築く。

1872 (明治 5 ・ 1 月 ・ 26 歳) 神田松永町・馬島 譲方で医術開業

馬島 譲 (ゆずる) 「正方より 12 歳年長」



(1834 ・ 天保 5 ～ 1902 ・ 明治 35)

丹波の人。年少時に長崎で洋式医学を修め、後、松本順に随って江戸に出る。時は幕末、若者と共に幕府撒兵隊に加わり各地に転戦。

1868 ・ 明治元年、初めて大病院医師試補、翌年、開拓使一等医師に任ぜられ、間もなく大学・及び文部省大助教に転ず。1872 ・ 明治 5 年開拓使七等出仕、札幌に赴任、1881 ・ 明治 14 年、官立札幌病院長、同 87 ・ 明治 20 年官を辞し、小樽に私立愛生病院を設立。北海道創業の恩人とされる。

1868 (明治 1・22 歳) 東京・神田の「医学校」に入学

(W. ウィリスに学ぶ)

1869 (明治 2・23 歳) 句読師助を被命

1871 (明治 4・2 月・25 歳) 算学助を被命

(〃 5 月) 大学少得業生拝命

(〃 6 月～ Th. ホフマン、及び B. ミュルレル

に従い医学修学 ～1874 年まで)

(〃 8 月) 文部権少教授、文部 13 等出仕拝命

(〃 9 月) 文部省改革に付き免出仕



1872 (明治 5・8 月)

大学東校中授読生被命

(〃 12 月)

局監拝命

1873 (明治 6・3 月)

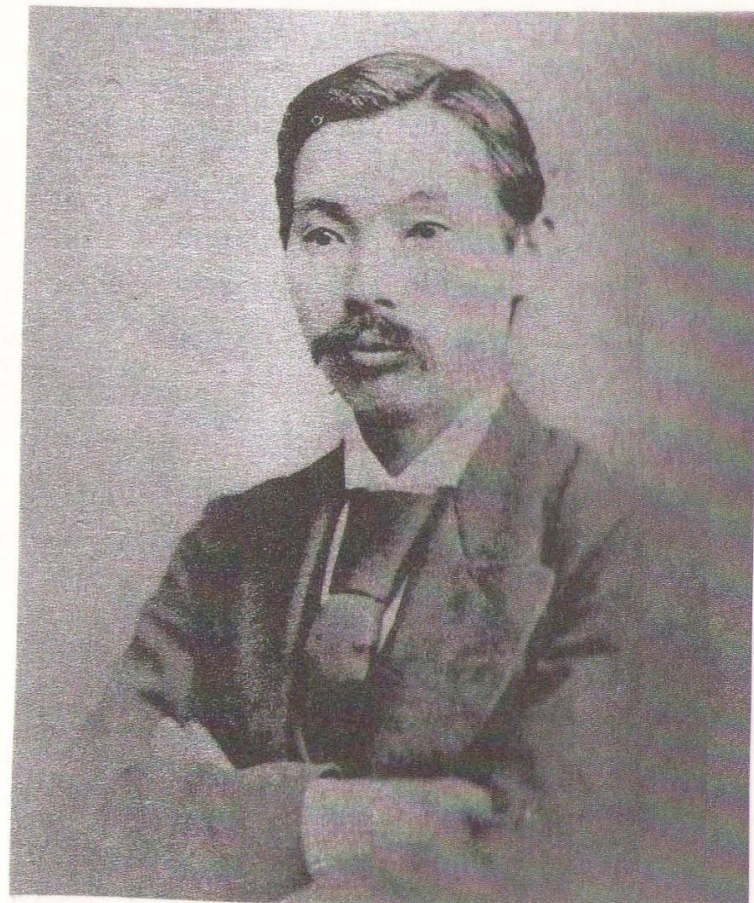
○長与専齋、帰国

(〃 5 月・27 歳) 文部省 13 等出仕拝命

医学校出勤被命

(〃 12 月)

○文部省、医制上申書提出



長與專斎

文部省醫制上申書

(明治六月十二月二十七日)

去六月中醫制取調被仰出別冊編成仕候從來醫術の儀は古昔より一定の法制無之其弊習深く人心に浸淫し一時に收拾難致殊に醫師等級診察料に至りては醫俗とも目前の不便に係り規則に堪兼候事情も有之候へ共醫師自ら藥を鬻ぎ候より今日百端の弊害を醸候に付此一事を聞き候ては醫制の要領相立不申依之先づ三府に於て醫俗の事情を斟酌し診察料を定め自ら藥を鬻ぐを禁ずる等徐々着手致し各地方は其官員に委ね便利の處分爲申出其折を以て規則に照し逐次施行いたし以て後進成學の日を期候様有之度尤諸規則中即今難被行ものは其條下に當分の處分を附記致候へども尙實際に至ては其運用順序一々記載難致臨時開申可仕此段附して申上候也

(別冊 略)

・ ・ ・ 從來醫術の儀は古昔より一定の法制無之其弊習深く人心に浸淫し・ ・ ・ 醫師自ら藥を鬻ぎ候より今日百端の弊害を醸し候に付此一事を聞き候ては医制の要領相立不申・ ・ ・

1874 (〃 7・4月・28歳) 依願免出仕

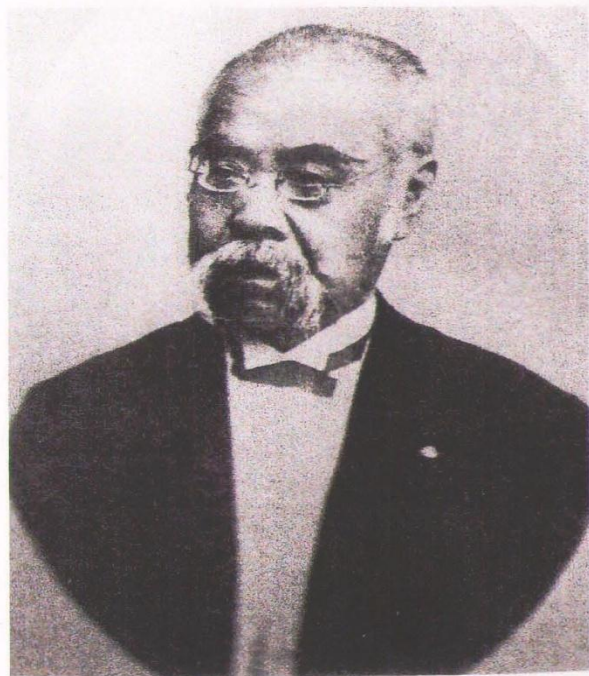
(〃 ・5月)

○東京府病院 (院長岩佐純) 設立

(〃 ・〃)

府下病院雇医師拝命

岩佐 純 (1836・天保7～1912・明治45) 「正方より10歳年長」
(あつし)



越前 (福井県) 福井藩医の家に
生まる。藩医であった坪井信良に
蘭方医学を学び、命ぜられて江戸
の坪井芳洲塾を経て、佐倉順天堂
佐藤尚中門、さらに長崎でポンペ
・ボードインに学ぶ。1870・明治
3年、相良知安と共に医学校取調
御用掛を被命、ドイツ医学を範と
することを決めた。後、宮内省・
文部省に入り、宮中に侍医・顧問
官を兼ね、男爵。享年77歳。

1874(〃・6月)

生徒教授方兼務被命

(〃・8月)

○「医制」三府へ達

医 制

「医制」のねらい

○医療の西欧的近代化



漢方撲滅 → 医薬分業

○医療における「技術評価」



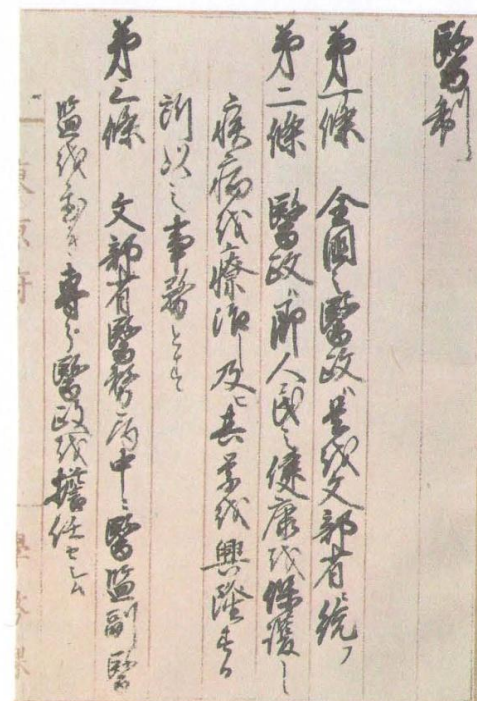
診療費の公的取立て

第41条 医師たる者は自ら薬を鬻ぐことを禁ず。医師は処方書を病家に付与し、相当の診察料を受取るべし

二等医師は願いにより薬舗開業の仮免状を授け調薬を許す

第48条 病家診察料を送らざる時は医師の申立を以て、医務取締及び区戸長之を取立つべし

第55条 調薬は薬舗主・薬舗手代及び薬舗見習に非ざれば之を許さず但し薬舗見習は必ず薬舗主若くは手代の指図を受け其目前にて調薬すべし。



1876 (〃 9・8月・30歳) 東京府医師開業者試験掛兼務拝命

1879 (明治 12・7月・33歳) 内務省、東京地方衛生会員被命

この頃より 三宅 秀・石黒忠直・福原有信らと

薬舗主(薬剤師) 教育につき協議、

三宅 秀 (ひいず)

「正方より 2歳年少」

1848・嘉永元～1938・昭和 13 年

佐倉藩堀田侯の侍医の子供。1863・文久 3 年遣欧使節
に随行して渡仏。帰朝後東京大学に出仕。医科大学教授
を経て学長。日本における医育制度の基礎を固める。

石黒忠直 (ただのり)

「正方より 1歳年長」

1845・弘化 2～1941・昭和 16 年

福島県生れ、1865・慶応元年医学所に入る。大学東校
に勤め、1870・明治 3 年大学少助教、1879・明治 12 年東
京大学医学部綜理心得 また、陸軍に関係し、陸軍軍医
総監、医務局長、軍医学校長、枢密顧問官など医界の長老

福原有信（ありのぶ） 「正方より 2 歳年少」

1848・嘉永元～1924・大正 13 年

安房松岡村に生る。17 歳で江戸の名医織田研斎の門に入り、翌年松本良順につき幕府の医学所に雇われ、大学東校中司薬を経て、1871・明治 4 年海軍病院薬局長となるも、翌 1872・明治 5 年官を辞し、京橋区出雲町 16 に洋風調剤薬局「資生堂」を創設（民間調剤薬局の嚆矢）、7 年には、2 階で松本良順らが診療を担当した。

別に福原は、1873・明治 6 年、日本橋本町に会社・薬種販売業資生堂を創設した。また、彼は 1888・明治 21 年、高木兼寛の賛同を得て、帝国生命保険会社を創立し、その社長となって経営の任に当たった。

戊午八

私立東京薬舗学校開業上申

学校位置

市所龜沢町上ノ目九八番

学校名称

東京薬舗学校

教則

第一期 六ヶ月

第二期 六ヶ月

第三期 六ヶ月

第四期 六ヶ月

第五期 六ヶ月

第六期 六ヶ月

第七期 六ヶ月

第八期 六ヶ月

第九期 六ヶ月

第十期 六ヶ月

第十一期 六ヶ月

第十二期 六ヶ月

第十三期 六ヶ月

第十四期 六ヶ月

第十五期 六ヶ月

第十六期 六ヶ月

第十七期 六ヶ月

第十八期 六ヶ月

第十九期 六ヶ月

第二十期 六ヶ月

第二十一期 六ヶ月

第二十二期 六ヶ月

第二十三期 六ヶ月

第二十四期 六ヶ月

第二十五期 六ヶ月

第二十六期 六ヶ月

第二十七期 六ヶ月

第二十八期 六ヶ月

第二十九期 六ヶ月

第三十期 六ヶ月

第三十一期 六ヶ月

第三十二期 六ヶ月

第三十三期 六ヶ月

第三十四期 六ヶ月

第三十五期 六ヶ月

第三十六期 六ヶ月

第三十七期 六ヶ月

第三十八期 六ヶ月

第三十九期 六ヶ月

第四十期 六ヶ月

第四十一期 六ヶ月

第四十二期 六ヶ月

第四十三期 六ヶ月

第四十四期 六ヶ月

第四十五期 六ヶ月

第四十六期 六ヶ月

第四十七期 六ヶ月

第四十八期 六ヶ月

第四十九期 六ヶ月

第五十期 六ヶ月

第五十一期 六ヶ月

第五十二期 六ヶ月

第五十三期 六ヶ月

第五十四期 六ヶ月

第五十五期 六ヶ月

第五十六期 六ヶ月

1880 (明治 13・秋・34 歳)「私立東京薬舗学校開業上申」完成
1881 (〃 14・1 月・35 歳) 上申書、本所区經由東京府へ提出

教科書

第一期 六ヶ月 化学

第二期 六ヶ月 物理

第三期 六ヶ月 数学

第四期 六ヶ月 英語

第五期 六ヶ月 国語

第六期 六ヶ月 歴史

第七期 六ヶ月 地理

第八期 六ヶ月 衛生

第九期 六ヶ月 農業

第十期 六ヶ月 工業

第十一期 六ヶ月 商業

第十二期 六ヶ月 法律

第十三期 六ヶ月 政治

第十四期 六ヶ月 経済

第十五期 六ヶ月 社会

第十六期 六ヶ月 教育

第十七期 六ヶ月 文学

第十八期 六ヶ月 艺术

第十九期 六ヶ月 体育

第二十期 六ヶ月 音楽

第二十一期 六ヶ月 美術

第二十二期 六ヶ月 演劇

第二十三期 六ヶ月 園芸

第二十四期 六ヶ月 畜産

第二十五期 六ヶ月 漁業

第二十六期 六ヶ月 林業

第二十七期 六ヶ月 矿业

第二十八期 六ヶ月 製鉄

第二十九期 六ヶ月 造船

第三十期 六ヶ月 航空

第三十一期 六ヶ月 航海

第三十二期 六ヶ月 測量

第三十三期 六ヶ月 建築

第三十四期 六ヶ月 土木

第三十五期 六ヶ月 機械

第三十六期 六ヶ月 電気

第三十七期 六ヶ月 化学

第三十八期 六ヶ月 物理

第三十九期 六ヶ月 数学

第四十期 六ヶ月 英語

第四十一期 六ヶ月 国語

第四十二期 六ヶ月 歴史

第四十三期 六ヶ月 地理

第四十四期 六ヶ月 衛生

學務委員 村松時寛

明治十三年十月十四日

東京府知事 村松時寛

東京府知事 村松時寛

本所区長 設樂謙堂



第六號

福井縣士族

藤田蒲三郎

十六年

藥學卒業候事

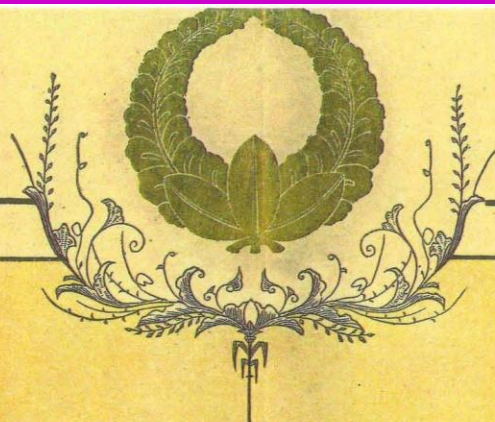
卒業試驗全成績 乙

物理學 化學

植物學 藥品學

製藥學 分析學

調劑學 藥物試驗



明治十七年十一月廿三日



東京藥學校長藤田正方



1881(明治14・1月・35歳)

任文部三等属

1882(" 15・7月・36歳)

任文部二等属

1884(" 17・4月)

●内務省達

内務省達 明治 17 年 4 月

「医師薬舗兼業ノ儀ハ不相成（相成りまじき）旨、
従来指令（に）及（び）置（き）候処、自今、兼業
致（すも）不苦（苦しからざる）儀ト可心得（ここ
ろうべく）コノ旨訓示候也」

以後の日本医療に見る特質

- 江戸時代の「町医」の存在の延長
- 「治療即服薬」思想の蔓延

1886(" 19・1月・40歳)

非職被命

(" 9月9日 ")

逝去

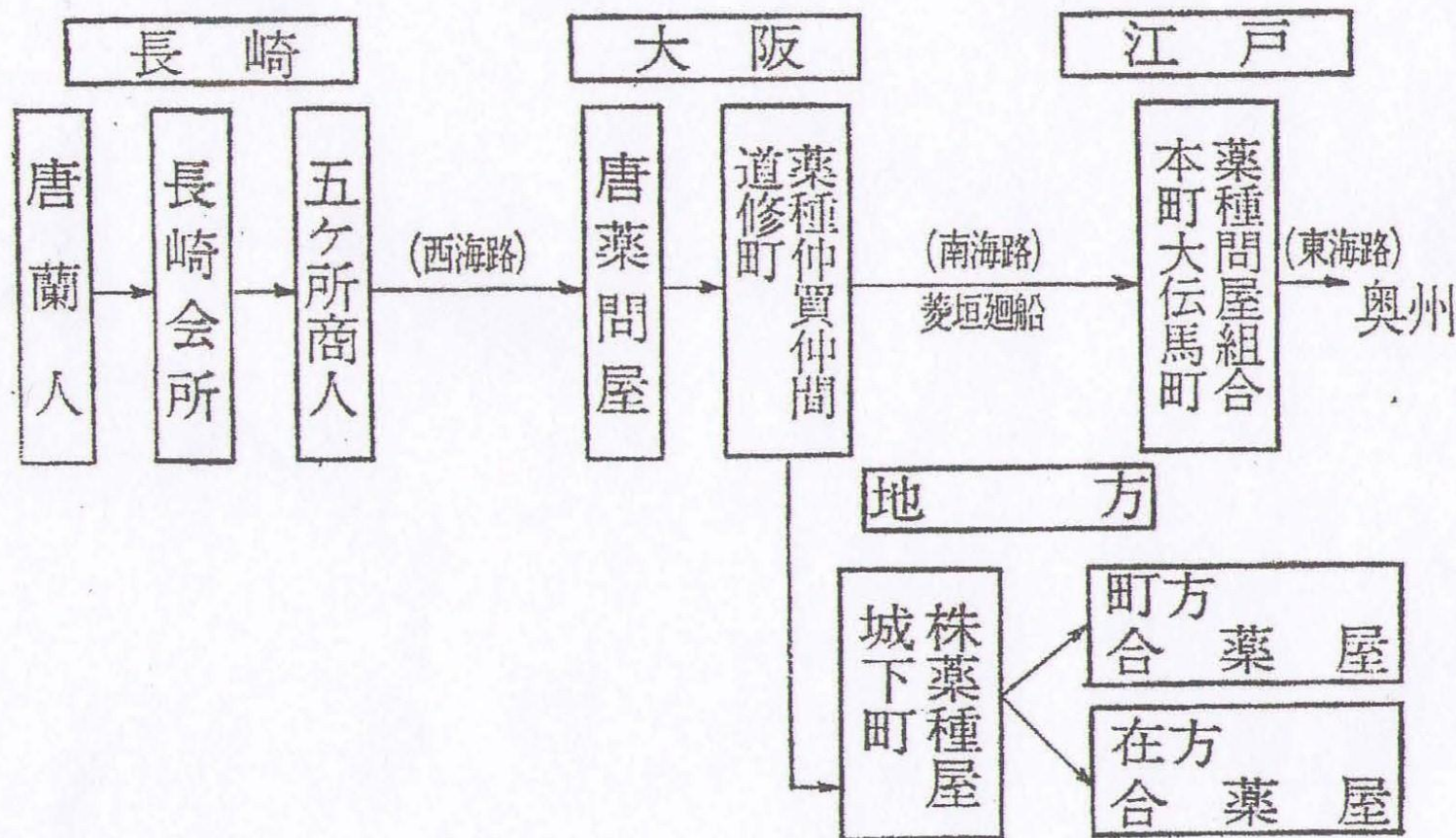
校長

下山順一郎・丹波敬三



江戸中・後期の医薬流通システム

関係者の自主的規制の効果



藥品營業並藥品取扱規則

(明治二十二年三月十五日)
法律 第十號

第一章 藥劑師

第一條 藥劑師トハ藥局ヲ開設シ醫師ノ處方箋ニ據リ藥劑ヲ調合スル者ヲ云フ

藥劑師ハ藥品ノ製造及販賣ヲ爲スコトヲ得

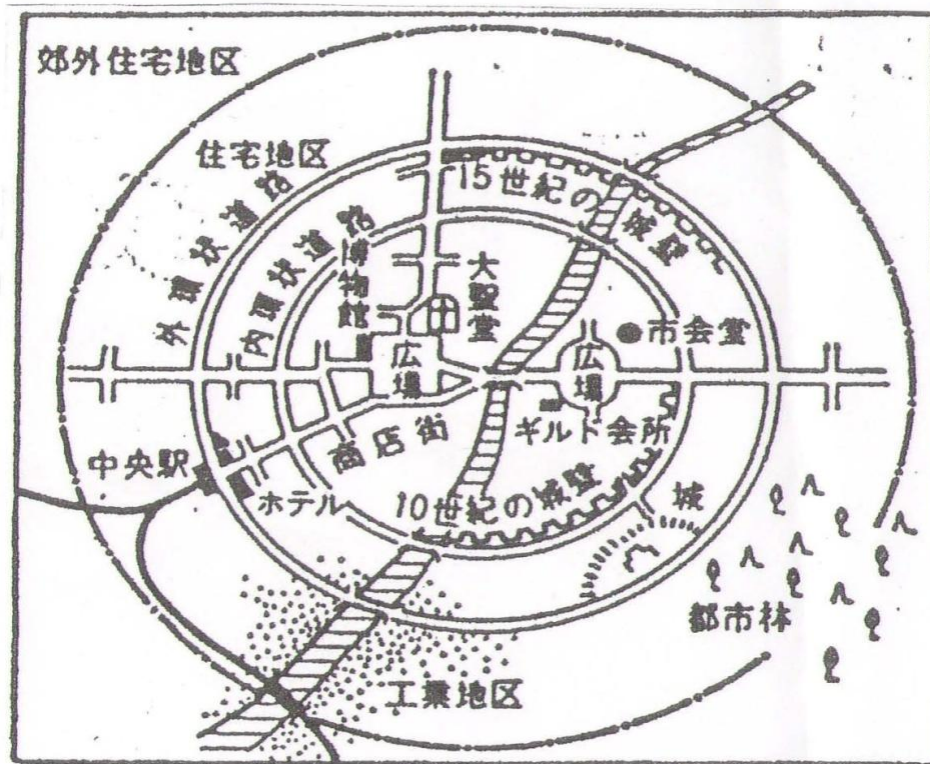
附則

第四十三條 醫師ハ自ラ診療スル患者ノ處方ニ限リ第二十六條第二十七條第二十九條ニ從ヒ自宅ニ於テ藥劑ヲ調合シ販賣授與スルコトヲ得此場合ニ於テハ第三十八條ノ監視ヲ受クヘシ

醫師ハ第三十四條ニ從ヒ醫師タルノ證明書ヲ以テ藥劑師藥種商製藥者ヨリ毒藥劇藥ヲ買取ルコトヲ得

第四十四條 此規則施行以前ニ於テ內務省ヨリ藥舗開業免狀ヲ受ケタル者ハ藥劑師タルノ効ヲ有ス

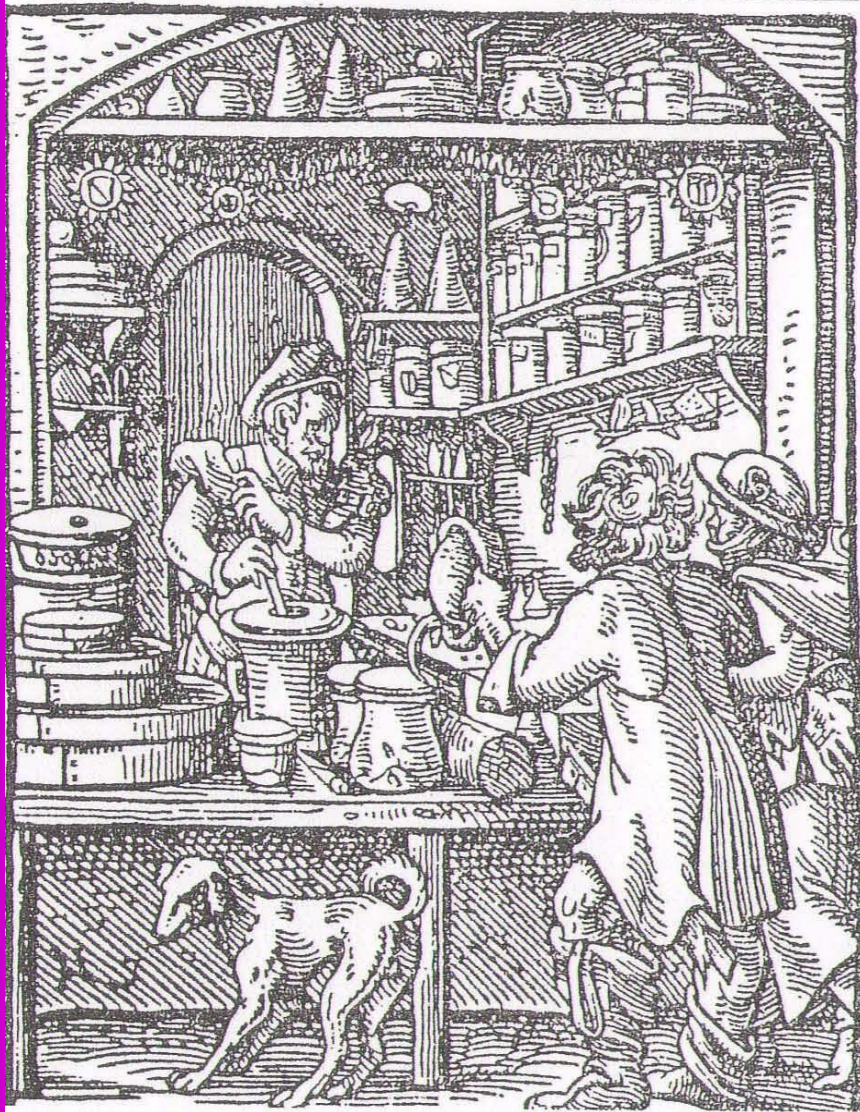
ドイツ都市のモデル（西欧都市景観の共通性）



- 都市と農村の明瞭な区別
- 都市を囲む城壁
- 中心部に広場
Markt-splatz、market-place
- 教会・市庁舎・議事堂・
ギルド会所・銀行・大型店舗
薬局など
- 放射・環状方向の、(時には)
井桁状の道路
- 鉄道は終着駅型
(乗り入れは地下鉄方式)

フィレンツェにおける同業者組合（15世紀頃）

大組合 arti maggiori	羅紗業, 毛織物業, 絹織物業, 金融業 医薬業, 鞣革業, 裁判官・公証人
小組合 arti miniori	肉屋, 靴屋, 革鞣工, 石工, 油屋, 服地屋 錠前屋, 具足師, 皮仕上工, 大工, 宿屋, 鍛冶屋, 酒屋, パン屋

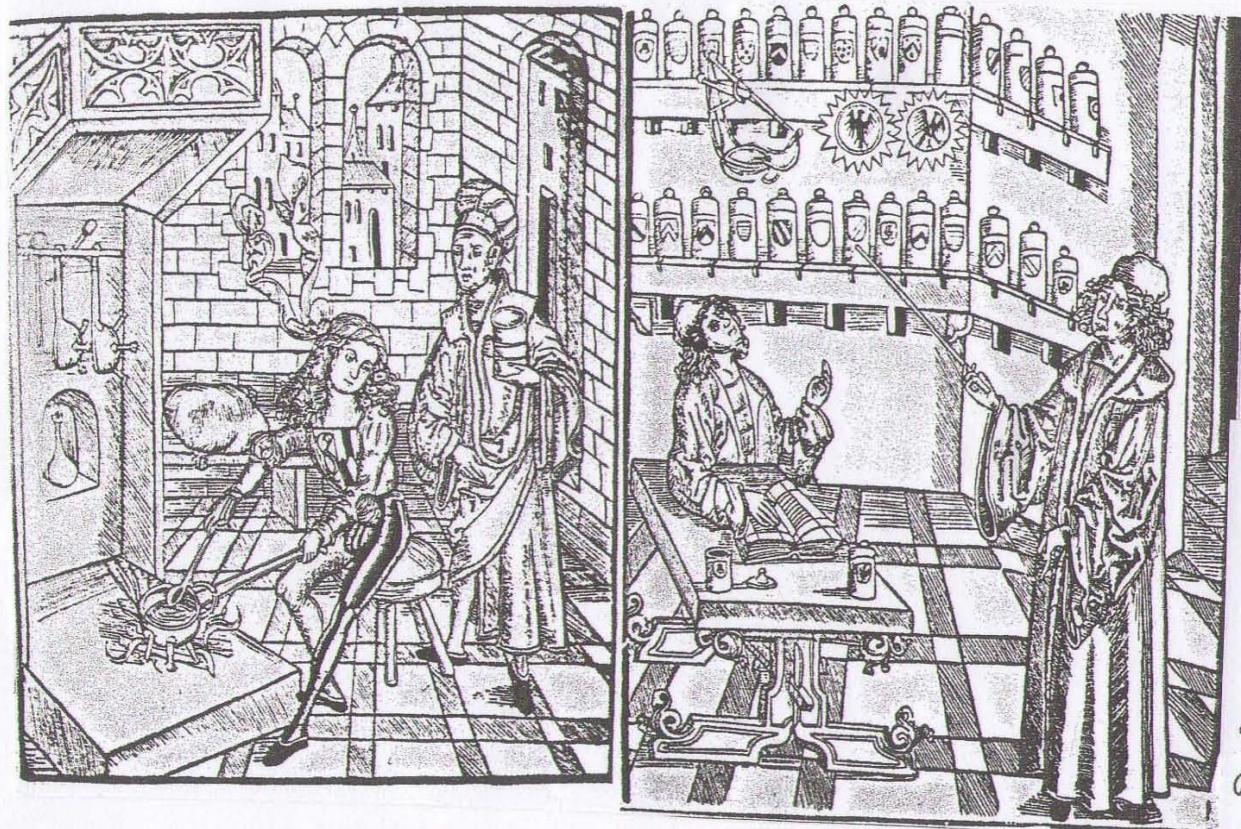


薬つくりのわしの部屋には
薬草を甘くあわせた
口ざわり好いものがいっぱいじゃ
くだしも浣腸も自由自在
体の弱い方々を強くする
見事な神薬も作ってみせる
小水をよっく調べたお医者者の指示で
あらゆるお薬を作ってみせる

西洋職人づくし (岩崎美術社・1970)

ヨースト・アマン版、ハンス・ザックス詩

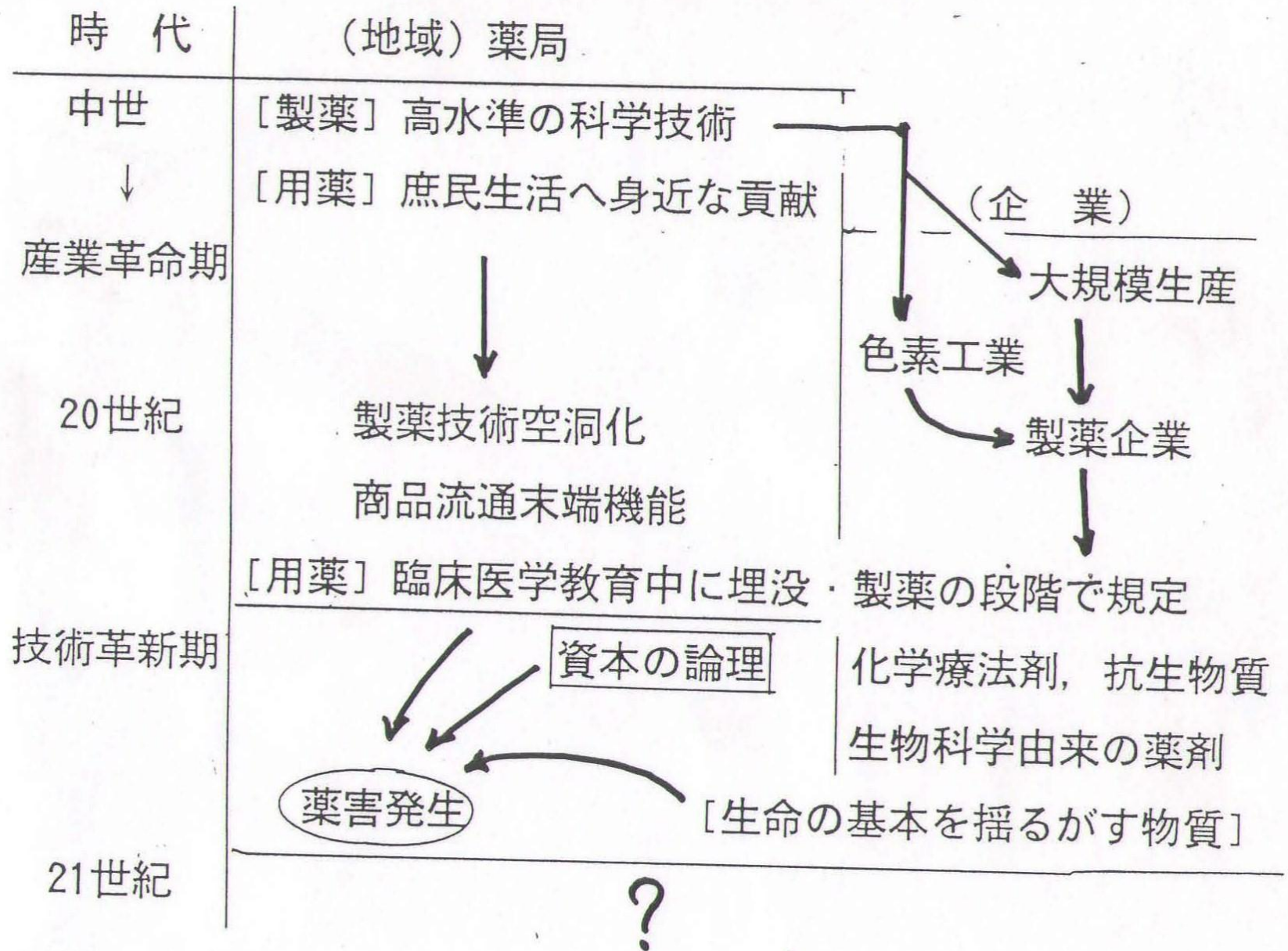
▽ 15世紀の薬局・ラボラトリウム



製薬用ラボラトリウムが
医薬品陳列場の隣にありま
した。前者はアラビア起源
「錬金術」の絶好な実験場
となり、ここが、近代化学
の基礎を築く科学者を育て
る事になります。

薬剤師は、一般市民の身
近に居て、何でも相談でき
る頼もしい存在でした。

○産業社会の到来と薬系技術の変遷



▽ ハロゲン元素の発見は薬局ラボトリウム出身者であった

- 塩素 1774 シェーレ (スウェーデン、1742~86)
- 沃素 1811 クールトワ (フランス、1777~1838)
- 臭素 1826 バラール (フランス、1802~76)
- 弗素 1866 モアッサン (フランス、1852~1907)

なお、モアッサンは 20 世紀まで生存、
1906 年にノーベル化学賞を受けました。
19 世紀頃まで市中の薬局ラボラトリー
周辺の研究水準の高さを証明しています。

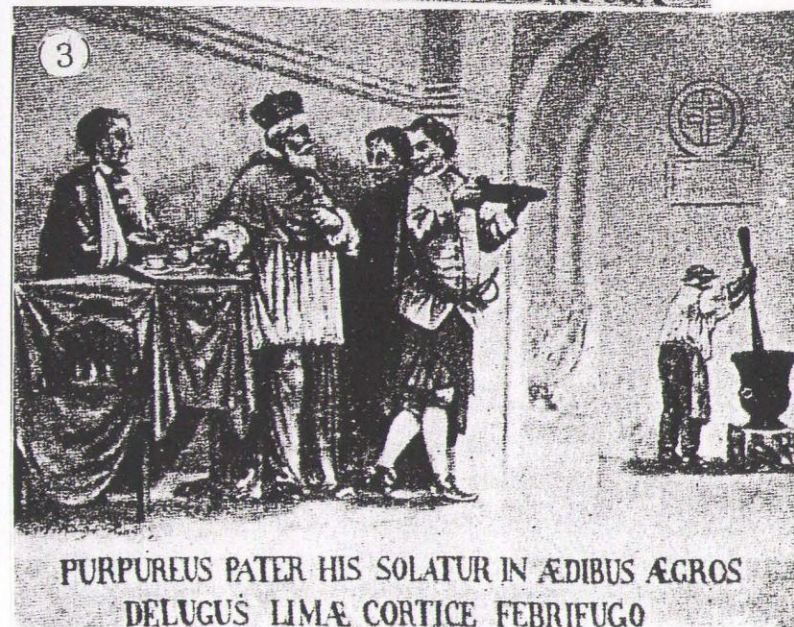
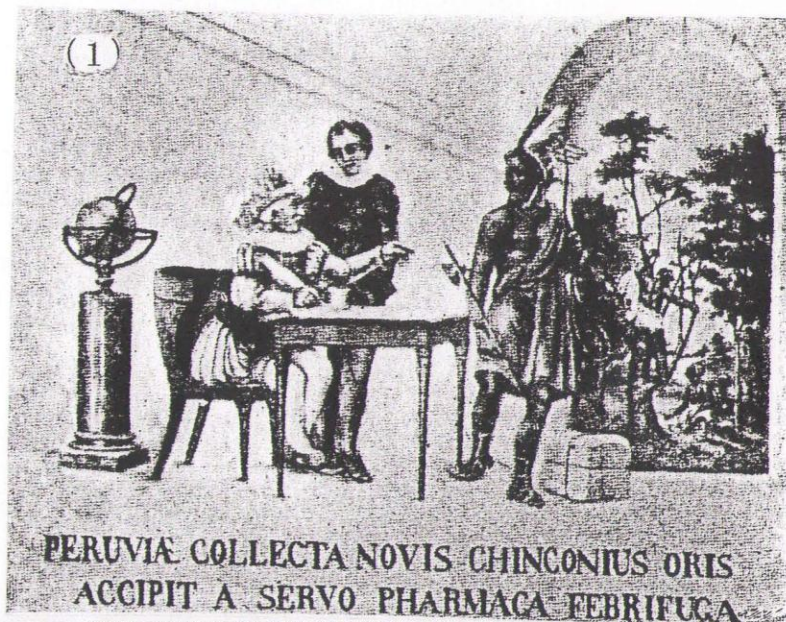


モアッサンと弗素遊離成功の記念牌

「キニーネ」研究のミステリー： ローマの教会壁画から

Del Cinchon (17世紀)の伝説,

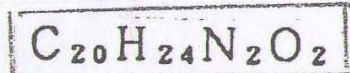
フレスコ画 (Ospedale Spiritu Santo・ローマ)



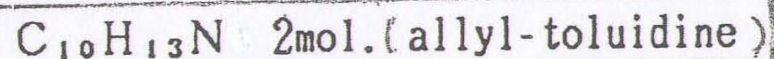
W. H. Perkin (1838~1907) の登場

キニーネ

アリール・トルイジンの2分子を脱水・酸化したもの



酸化脱水



重クロム酸硫酸

暗色の「ヤニ」失敗

アニリンの重クロム酸硫酸・脱水酸化

黒い沈殿

染料になると、彼は直感

mauve



若き日のパーキン

20 世紀半ばに「化学療法剤」を製産した
人工染料製造企業の成立年代

ドイツ：	バイエル	1850	Farbenfabrikation vorm Friedrich Bayer & Co.
	ヘキスト	1862	Höchstes Farbenwerke vorm Meister, Lucius und Brüning.
スイス：	ガイギー	1856	Johann Rudolf Geigy.
	チバ	1864	Gesellschaft für Chemische Industrie in Basel.
	サンド	1886	Chemische Fabrikation vorm Sandoz.

川瀬 清 名誉教授 略歴

●略歴

1945年(昭和20年) 東京薬学専門学校 卒業

1945年(昭和20年) 東京薬学専門学校 副手(生薬学)

その後 東京薬科大学 助手、講師、助教授を経て

1975年(昭和50年) 東京薬科大学 教授(科学史、薬学概論)

1991年(平成 3年) 東京薬科大学 定年退職

※在職中におけるクラブ顧問 : 合唱団、漢方研究部

●学会関係

- ・日本薬史学会 幹事、事務局編集担当
- ・社会薬学研究会 事務局長、会長